2022 年 11 月 17 日放送

印象に残る症例①

月経困難症と漢方

千葉中央メディカルセンター　和漢診療科　　**太田　陽子**

今回は、月経困難症の患者さんに漢方薬を投与した経験をお話ししようと思います。月経困難症や月経前症候群など、月経に関連する不調をお持ちの女性は比較的多いですが、病院を受診せずに、市販薬を内服しながら毎月その時期を乗り切ったり、症状が辛い時も職場に言い出せず無理をして仕事をされる患者さんも少なくありません。月経前症候群の症状があるにもかかわらず、6 割以上の女性が対処法や治療法を知らず、仕事や学校を休まずに我慢し、9 割の方が婦人科を受診したことがない、という統計があります。一方、漢方薬によってそれらの症状が消失または緩和するケースもしばしば経験します。本日は、漢方薬で月経に伴う各種症状が改善した症例をご紹介します。

症例は 30 歳女性で、主訴は過多月経です。子宮筋腫および乳腺線維腺腫があり、それぞれ婦人科および乳腺外科に通院中で、これまでに子宮筋腫で腹腔鏡手術および開腹手術をそれぞれ 1 回ずつ受けられていました。以前から月経量が多いため、2 年ほど前まで約 1 年間、鉄剤を内服していたそうです。その後、婦人科で桂枝茯苓丸を 1 か月ほど処方されたそうですが、次の診察時に子宮筋腫が増大していたため、桂枝茯苓丸の内服を中止し、ホルモン薬であるジエノゲストの内服を開始されました。ジエノゲスト内服中は月経がなかったため、鉄剤の内服もしていませんでしたが、乳腺線維腺腫の数が増加し、ホルモン治療をすると増加すると言われたため、ジエノゲストの内服を自己中断されたそうです。その翌月に

は月経が再開し、やはり過多月経であったため、漢方薬による症状緩和を期待して当科外来を受診されました。

月経が再開したその月に受診され、血液検査では Hb14.6 と貧血を認めませんでした。その他の血算、血液生化学所見も異常を認めませんでした。

和漢診療学的所見は、体格は中肉中背、下腿浮腫は認めませんでしたが、自覚することがあり、頭痛も時々あるとのことでした。また、手足の冷えや腰痛があり、月経時には髪の毛が抜けやすいとのことでした。最近眠りが浅いとの訴えもありました。月経は 30 日周期で整、過多月経あり。便通異常はありません。脈候はやや沈、やや虚、数遅中間、やや小。舌候はやや暗赤色で、腫大・歯痕を認め、やや薄い白苔に被われていました。腹候は、腹力 4/V で、腹直筋攣急を認め、右臍傍部および左鼠径部に圧痛を認めました。

そこで、和漢診療学的に陰虚証、瘀血、血虚、水滞と考え、当帰芍薬散エキス 7.5g を分 3 で処方しました。3 週間後、月経はまだ来ていないが、身体が温かくなった、気持ちの落ち込みがなくなった、足が浮腫まなくなり、頭痛もなくなり、夜も眠れているとのことでした。当帰芍薬散内服後 2 か月後には、月経量が減り身体が楽になったと言われました。元々は月経 1 日目と 2 日目に月経量が非常に多く、1 時間でナプキンを替えないといけなかったそうで、さらに 3 日目から 7 日目はトイレのたびに替えていたとのことです。漢方薬を飲み始めてからは、1 日目と 2 日目は 2 時間もつようになり、4 日間で月経が終わったそうです。また、乳腺外科を受診したところ、線維腺腫の増大はなかったとのことでした。また、髪の毛の抜ける量が減ったとも話されていました。この日の血液検査でも、Hb は正常値で貧血を認めませんでした。

当帰芍薬散の処方を継続し、内服開始から 3 か月後の再診時は、月経量がさらに減少し、1 日目と 2 日目はナプキンが 3 時間は余裕でもつようになったと言われました。普段は 1 日目の夜は毎回漏れていたのが、それもなくなり、月経は 3 日間でほとんど量が減り、4 日目から 6 日目は少量ずつになり、6 日間で月経が終わったとのことでした。以前はあったレバー状の凝血塊が全くなくなったそうです。さらに、元々あった月経前と月経中の頭痛もなく、月経中の腰痛や腹痛もなくなり、月経後にいつもできていた口内炎ができず、抜け毛もなくなったとのことでした。当帰芍薬散を内服することで、月経に伴う各種症状が著明に改善したため、その後も内服を継続していただいています。

本症例の考察ですが、当帰芍薬散は『金匱要略』が原典で、婦人妊娠病脈証并治第二十に「婦人懐娠、腹中疠痛するは、当帰芍薬散之を主る。」とあり、婦人雑病脈証并治第二十二に「婦人腹中諸疾痛は、当帰芍薬散之を主る。」とあります。筋肉が全体的に軟弱で疲労しやすく、足腰の冷えやすい者の貧血や倦怠感、更年期障害、月経不順、月経困難に頻用されます。当帰芍薬散証の特徴は、色白やせ型なで肩で、冷え性の虚弱タイプで、太陰病で血虚

と水滞があり、腹部は軟弱で、臍傍部に抵抗・圧痛を認めることです。本症例では脈診で虚証と判断し、冷えもあったことから陰虚証とし、瘀血、血虚、水滞を認めたことから、当帰芍薬散証と考えて当帰芍薬散を用いました。当帰芍薬散を服用してから 3 週間後、冷え、浮腫み、頭痛が改善し、その後、月経過多をはじめ、腰痛、腹痛、抜け毛、口内炎など、様々な症状がほぼ消失したことから当帰芍薬散が有効であったと考えました。

ここで、過多月経についてご説明します。正常の月経は、3 日～7 日で終わり、2 日目が一番経血量が多いですが、ナプキンの交換頻度は多い時でも 2～3 時間毎の交換で済むのが一般的です。過多月経の方は、昼でも夜用のナプキンを使用したり、1 時間毎に交換しなければ漏れてしまったり、経血量が多い日数が長く続いたりします。レバー状の凝血塊が出てくることもしばしばみられます。本症例では、1 日目と 2 日目に 1 時間しかもたなかったものが、当帰芍薬散を内服してから 3 時間は余裕でもつようになり、凝血塊がなくなったとのことで、正常の月経量になったと考えられます。

過多月経に対して用いられることの多い漢方薬として、桂枝茯苓丸、温経湯、芎帰膠艾湯、黄連解毒湯などが報告されています。月経困難症や月経前症候群に対して様々な漢方治療で改善した報告も多くみられます。こういった女性特有の症状に対し、しばしば用いられる漢方薬として、当帰芍薬散、桂枝茯苓丸、加味逍遙散が挙げられます。当帰芍薬散が陰証に用いられる薬であるのに対し、桂枝茯苓丸と加味逍遙散は陽証に用いられます。桂枝茯苓丸はやや実証寄りに用いられ、瘀血や水滞を認める場合に用いられます。加味逍遙散は気血水いずれの異常にも用いられますが、柴胡が含まれるため、胸脇苦満があると使いやすいです。
また、当帰芍薬散は血を補い、血を巡らせる働きのある当帰・川芎・芍薬と、利水作用のある朮・茯苓・沢瀉から構成されています。本症例のように、陰虚証で瘀血・血虚・水滞の所見を認める患者さん、すなわち冷え性で浮腫みやすいような方に効果のある薬です。また、冷えを改善させる効果もあり、近年増加傾向である不妊症の患者さんにも用いることができます。もちろん、女性特有の症状にお困りでない方や、男性の方でも、老若男女を問わず、陰虚証で瘀血や水滞の所見を認める患者さんには適応があります。腹痛、下肢痛、めまい、頭痛、中耳炎、認知症など、様々な診療科で用いることができ、幅広く活用できる処方です。

副作用や併存疾患のために女性ホルモンによる治療が困難な患者さんにも、漢方治療という選択肢をもつことは非常に有益だと考えております。また、月経困難症などの症状は我慢するものではなく、治療可能な症状であること、その選択肢の一つとして漢方治療があることを、多くの方々に認識していただき、これらの症状に悩まされる患者さんが少しでも減ることを期待します。